

Title	サルトルの「超越」
Author(s)	加藤, 俊史
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1980, 13, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12152
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

サルトルの「超越」

加

藤

俊

史

指向性

矛盾する意味をになわせることを可能とするものであるゆえに、まずサルトルの指向性の概念がいかなる意味をに すなわち「あらゆる意識は、 そして、この「指向性」は、 が見られるが、この野心の現実化を動機づけたのが、フッサールの現象学の根本概念である「指向性」であった。 デカルト以来の近代二元論の超克、近代二元論のヴァリエーションとしての観念論と実在論との同時的超克の野心 サルトルの現象学的存在論の根本概念は、 何ものかについての意識である」という命題は、いささか曖昧であって、 サルトルの現象学的存在論の根本概念となった。 「指向性」(intentionnalité)である。サルトルの現象学的存在論には、 しかるに、この意識の指向性の概念、 まったく相

象学の現象学的還元の根本的方法である。一方、サルトルの現象学的存在論においては、いわば「現象学的還元」 意識の指向性が顕示されるのは、 「反省」の平面においてである。この反省の方法は、 フッサール の超越論的現

またそれがいかなる思想を含意するものであるのかを検討する。

なっているのか、

たがって、 私の意識である。 性の領野についての記述というような立場は、 優位も存在しない。 言うまでもない。 フッサールのコギトであるが、その最初の源泉は近代哲学の創始者デカルトのコギトであることは明白である。 から完全に離れることもない。 トルは、 は上記の言葉に続いて、 ルの現象学的存在論においては、 ルは、この「反省」に特権的地位を与えはしない。 ているものは、 サルトル の還元の理論を積極的に受容しなかったのは、サルトルがフッサールの超越論的観念論を忌避したからであった。 に相当するものはとりもなおさずこの反省の方法を施行することに他ならないのであるが、サルトルがフッサー むしろ反省の可能性の条件を求め、 の現象学的存在論においては、 サルトルの存在論が、コギトから出発するかぎりにおいては近代哲学の枠組から出るものでないことは、 「超越論的主観性の領野」というものではなかったのである。 言いかえればコギトである。コギトがサルトルの現象学的存在論の出発点である。また、 意識の指向性が顕示されるのは、 しかし、 反省が、 「まったく反対に、非反省的意識が反省を可能ならしめるのである。」と言っている。(3) コギトの哲学であることを以って、 反省される意識を、それ自身に対して顕示するのではない。」 と言っている。 ハイデッガーの 特権的地位にある認識主観としての反省的意識によって把えられた超越論的主観 反省的意識 反省に対する反省以前的なコギトの存在論的優位を主張するのである。 認識の理論的優位という錯覚として却けられるのである。 「存在」を希求することはない。 サルトルは、 反省的水準においてであろう。反省的意識に現前するものは、 (反省はそれ自身ひとつの意識である) に主題として与えられ サルトルの存在論を近代主義であると断ずるわけに 「反省される意識に対する反省のいかなる種類の また、 サルトルのコギトの直接的 『存在と無』におけるサルト サル サルト 源流 トル サ ル ル

は

いかないのである。

サルトルは言う。

「コギトは、

ひき渡すことを求められるものをしか、

ひき渡さない。」

#

サルトルの「超越」 見れば、サルトルの現象学的哲学の二人の師のうち、フッサールはコギトから出発したがコギトのうちに閉じ込も する批判を内包するものである。ところで、サルトルがコギトから出発して求めたものは、 はなかった。サルトルによれば、諸々の近代的主観は擬物論的錯覚 (illusion chosiste) から生じたものである。 野における関係、 ってしまったのであり、ハイデッガーはコギトを欠落させたまま現存在の分析を遂行したのである。) って言えば、それは「超越」(transcendance)を意味する。サルトルにとっては、意識の指向性は、超越論的領 『存在と無』は、積極的には人間存在の存在論であるが、その裏に擬物論的錯覚から生じた諸々の近代的主観に対 さて、サルトルの現象学的存在論において意識の指向性はいかなる意味をになっているのであろうか。一言を以 意識の可能性の条件としての「人間的現実」(réalité humaine) の存在論的分析であった。(サルトルから あるいは内在における関係を、意味するものではなかった。反対に、意識の指向性は、 超越論的主観性の領野というようなもので 意識の指向性を根底に 内在性の

ルトルがコギトから出発して求めたものは、

思惟実体、

純粋認識主観、

係を問題として立てた存在論である。 在をば対自存在と、現象の存在をば即自存在と名づけて、それらを「絶対的に切り離された存在領域」として分析 を意味するものであった。この二つの存在とは「意識の存在」と「現象の存在」とである。サルトルは、(6)(6) のであった。サルトルにとっては、意識の指向性は、相互に異なる二つの存在を要求する原初的関係、超越の関係 神話からの解放を動機づけるものであった。また、それは、観念と事物、現象と本体の二元性の超克を意味するも している。そして、 『存在と無』は、その標題が示すように、対自存在 (=無) と即自存在 (=存在) との存在関 しかし、対自存在と即自存在とが、まずそれぞれ「孤立したもの」として定

意識の存

立されて、

しかる後にそれらの存在関係が問題として立てられていると、解釈するならば、

〈サルトルの存在論は

一元論である〉と誤解することになる。反対に、超越の関係こそが原初的な (primitive) ものである。

の存在論は、

「超越の哲学」である。

サルトル

然たる一つの《現われ》 である。」 は何ら実体的なものをもっていない。それは、それがあらわれるかぎりにおいてしか存在しないという意味で、 ならず、そして意識はこの存在について非措定的な意識を持っていると、いうことである。しかしながら、 認する。簡単に言えば、現われることができるためには、それに対して現われが現われるところの存在がなければ である。それはまた、非措定的な「存在(についての)意識」である。サルトルは、デカルト的な反省によってで(コン ついてのあらゆる措定的意識は、同時に、それ自身についての非措定的意識である。」この自己についての非措定的 識は、何ものかについての意識である。その意味は、超越的対象の措定でないような意識は存在しないということ、、、、、、 意識は、「ひとつの新しい意識」ではなくて、「何ものかについての意識にとって、唯一の可能な存在のしかた」(12) は、この指向的意識に或る「自発的な意識」(意識の意識)が構成的なものとして伴うことを主張する。 である。あるいは、言ってよければ、意識は何らの《内容》をももたないということである。」ところで、(8) はなくて、この自己についての非措定的意識から、意識の可能性の条件としての超現象的な「意識の存在」を、 サルトルは、 意識の指向性について次のように述べている。「フッサールの示したところによれば、あらゆる意 「対象に サルトル 純

が信仰の問題であるのと同等である。サルトルは、端的に信じないことによって、このような〈本体的存在〉から、 が決して知ることのできない サルトルは、この「意識の存在」と平行して「現象の存在」を確認する。 〈本体的存在〉について言えば、これは信仰の問題である。それは、 現象の背後に隠れていてわれわれ 〈隠れたる神〉

サルトルの「招越」 この「存在現象」の「存在」が問題となり、「現象の存在は存在現象に還元され得ない」のである。また、独我論(エラ) ったようなしかたで、われわれの前にあらわにされるであろう。」(存在論が可能であるのはこの存在論以前的な存(4) 存在論以前的な存在了解を次のように表現する。「存在は、何らかの直接的な接近、たとえば倦怠とか嘔き気とい り、存在者の存在である。ところで、一方われわれは、存在論以前的な存在了解をもっている。サルトルは、この 象は存在者であり、存在者は現象である。そしてここにおいて問題の対象である「存在」は、この現象の存在であ と》であり、これは存在と対立するどころか、かえって存在の尺度となる。」したがって、 サルトルにとって、現と》であり、これは存在と対立するどころか、かえって存在の尺度となる。」したがって、 サルトルにとって、現 現われの背後にある存在をもはや信じないならば、現われは、逆に、全き確実性となる。その本質は《現われるこ おける現象概念と異なるものとなる。「ひとたびわれわれがニーチェのいわゆる《背後世界の錯覚》から脱却して、 在了解を条件としてである。) 存在は現象する。しかし、これは「存在現象」であって、「存在」については新たに

したがって不可知論的現象論におけるような現象と本体的存在との二元論から、解放される。サルトルの存在概念

〈本体的存在〉とは無縁のものである。また現象概念も、〈本体的存在〉を信じないことによって、現象論に

存在のしかたにかかわるものであって、いかなる場合にも存在そのものには適用されえないであろう。」したがっ

存在の特徴的な構造であるということになろう。」 しかるに「相対性と受動性というこの二つの規定は

「現象の存在はその被知覚ではありえないであろう。」存在が被知覚であるならば、存在は純粋な内在(18)

の存在」を被知覚に還元するわけにもいかない。「相対性と受動性、この両者が存在が被知覚に還元されるかぎり 的観念論(現象の背後の本体的存在を却ける点では、サルトルの現象学的存在論と同じ)がなしたように、「現象

6 の内在論的錯覚を打破する理論を動機づけたのが、 「現象の存在」の超現象性が確認される。 「意識の指向性」の概念であった。 「意識の指向性」 の概念

な存在を顕示する直観であらねばならないというこの明瞭な義務をよそにしては、意識にとって、いかなる存在も ければならなかった。それこそが、サルトルの関心事であったのであるから。したがって、サルトルにとって、 であった。それに対してサルトルにとっては、 対象とはいかにも矛盾した概念である。 ではなかったのだから、フッサールが内在論的錯覚に陥っているとは言えないだろう。しかし、内在的且つ超越的 しての はなかったのであるから、フッサールの認識論の根本概念としての「指向性」と自らの存在論的分析の根本概念と フッサールの現象学の 後者はサルトル自身の ここにあげられた二つの指向性の概念のうち、前者はサルトルの解釈したフッサールの「指向性」の意味であり、 意識はその最も深い本性において一つの超越的な存在に対する関係であるという意味に解せられる場合である。 「意識の指向性」 - 対象は内在的対象であるという考えがあった。フッサールのこの内在的対象は超越的対象と区別されるもの 「あらゆる意識は何ものかについての意識である。意識のこの定義は、まったく違った二つの意味に解せられう 「指向性」とを峻別しなければならなかったのは、 意識はその対象の存在にとって構成的なものであるという意味に解せられる場合であり、 の概念は、 「指向性」を発見したのであって、フッサールのように諸科学の基礎づけをもくろむもので 「指向性」 「超越が意識の構成的構造である」ということ、 の意味である。 またフッサールの「指向性」および「超越」の概念は多分に認識論的 「指向性」は一つの存在といま一つの存在との関係を示すものでな サルトルは、 当然のことであった。 自らの「超越の哲学」を理論化する根本概念として 「何ものかをすなわち一つの超越的 フッサールには、 多少とも指向 いっ ま一つは、

ない」ということ、 (21) もって与えられるが故に対象は超越的である、というのではない。)かくして、超現象的なものとして、現象の存在 現象の超現象的存在を意識の存立にとって必然的に要求するということである。(したがって、対象が「射影」を するものである。すなわちサルトルは、存在論的証明によって、現象の存在を確認するのである。意識そのものが、 「意識はその存在において一つの非意識的な超現象的な存在を巻きぞえにする」ことを、(3)

である「超越」を、指し示した。 存在)とを要求することを、確認した。 かくして、サルトルは、現象が二つの超現象的な存在すなわち意識の存在(=対自存在)と現象の存在(=即自 「意識の指向性」は、絶対的に切り離された二つの存在領域の根源的関係

が確認された。

在と即自存在とに分離されることによって、当然のこととしてその指向関係と同時に存在関係が問題となる。それでと即自存在とに分離されることによって、当然のこととしてその指向関係と同時に存在して、(2) (なお、本稿においては、サルトルが分離した二つの存在領域の指向関係のみを主題としている。存在が対自存

次いで、サルトルの「超越」の概念がいかなる思想を含意するものであるかを、検討することにしよう。

こそが、大部な存在論的分析の内容であるが、本稿においてはそれに触れない。

超越

たまさしくその時に」書かれた「フッサールの現象学の根本観念、指向性」と題する短い である。自分の思想を展開する基盤をそこに発見したからであろう。 九三三年の秋、サルトルはベルリンに留学し、現象学の諸著作を読む。そして現象学との出遭いに感激したの 「感激をもってフッサールの現象学を発見し 《論評》 がある。これは、

サル の忠実な解説であるよりも、むしろサルトルが現象学発見以前より抱いており後に『存在と無』において存在論と いる。 トル ルは程なく、自分の思想とフッサールの思想との隔りを悟ったに違いない。 翌年 未 だベルリン滞在中に書かれた して結実するサルトル自身の超越の思想を、フッサールの「指向性」に投影したものであると、思われる。サルト 『自我の超越』においてフッサールを讃えながらもすでに批判しなければならず、数年後の は トルの .フッサールの指向性概念を絶讃し、指向性を「意識の意識自身による超出 (dépassement)] と既に解釈して (サルトルにおいて「超出」は「超越」としばしば同じ概念である。) この論評は、フッサールの指向性概念 「独創的な哲学的表現の処女作」であるだけにないがしろにできないものである。ここにおいて、サル(ミロ) 『存在と無』におい

《論評》の冒頭は次の如くである。

《論評》においては絶讃したフッサールの指向性概念を自分の指向性概念から峻別しなければならなかった。

んという栄養消化の哲学であることか!」(4) の中にひっぱりこみ、 われわれは誰もみな、 論とに共通の錯覚を、 机とは、岩とは、 《彼は彼女を眼で食べた》こうした句やその他多くの表徴が、認識することは食うことだという実在論と観念 十分示している。フランスの哲学は、百年のアカデミスムをへて、なおまだこの段階にある ブランシュヴィックや、ラランドや、メイエルソンを読み、 家とは、 白いよだれで包み、ゆっくりと呑みこみ、自分自身の血肉に化するものと、 何か?《意識内容》の或る集合体、それらの内容の或る秩序である、 〈精神=蜘蛛〉 思いこんだもの が物を蜘蛛の巣 کی

ル哲学の方向を表明していると、 このサルトル 0 「処女作」の冒頭の文章が既に、 思われる。ここで、「栄養消化の哲学」と言われているものは、 『自我の超越』 に始まって 『存在と無』までをつらぬくサル 後に「内在論的

び擬物論的錯覚に対する批判である。内在論的錯覚とは、意識を容器の如きものとみなして「観念」あるいは、

マージュ」と名づけられるような「意識内容」が意識の内に存するとする考え方であり、擬物論的錯覚とは、

サルトルの「超越」 想が、 出遭うことによって、その超越の思想を理論化する道を見出したということになろう。上記のことがらは推測にす ならば、サルトルその人においては、 ぎないが事実はどうであれ、 を超克して、 (宮) とて、サルトルの「超越」が、ネガティヴに含意するところのものは、近代哲学が陥っている内在論的錯覚およさて、サルトルの「超越」が、ネガティヴに含意するところのものは、近代哲学が陥っている内在論的錯覚およ 『自我の超越』から『存在と無』までをつらぬく根源的思想であるように思われるのである。 「超越の哲学」を確立したいと考えていたのであろう。だから、 自分自身の超越の思想を、フッサールの指向性概念に投影したのであろう。もし、そうである サルトル哲学の出発点であり根本概念である「指向性」が含意するところの超越の思 「超越」の思想が「指向性」に先行することになる。サルトルは、現象学に 内在論的錯覚に陥った実在論・観念論 「感激をもって現象学を発見したま

錯覚」と論難されるようになる。

サルトルは、

現象学の発見以前において、

確に示すかたちで、 かたちで、 ては内在論的錯覚となり、 超越の思想がポジティヴに展開されたのが、 超越の思想がポジティヴに展開されたのが、 意識については擬物論的錯覚となる。そして、 『イマジネール』であり、 『自我の超越』である。 内在論的錯覚に対する批判を明確に示す 擬物論的錯覚に対する批判を明

に事物の性格を附与して意識に不透明性を持ちこむ考え方である。これらは同一の錯覚の二面であり、

対象につい

この対象物=イマージュは純粋に内在であると。これこそが、サルトルが「内在論的錯覚」と呼ぶところのもので 識がある。 それは想像(imagination) である。 われわれは何ものかのイマージュを思い浮かべることができる。

―――一見したところあたかもサルトルの超越の思想を瓦解させるかに思われる型の意

;現実的対象物の超越性。

ある。 フッサールから学んだ方法を駆使して、想像意識の現象学に取り組んだのは、蓋し当然のことであった。 想像意識は、 内在論的哲学に対抗する「超越の哲学」を浮き彫りにすることを可能にしてくれる意識である。 超越の思想を瓦解させるどころか、 「実在論と観念論とに共通の」 「内在論的錯覚」 の秘密を サルトル

の同 そのことからイマージュは対象物として存在するのだと結論される。 ジュを形成することなしにイマージュについて考えるや否や、地すべり現象が生じて、イマージュと対象物の本質 とは何ものかについての意識である。」それでは何故に、「心理学者たちや哲学者たちの大部分が採用して来た」(ユタ う。そうではなくてイマージュとは意識の或る型なのだ。イマージュとは作用であって事物ではない。イマージュ うなものであることを示さない。サルトルが、古典的な「イマージュ」の概念を振り払い、イマージュの意識につ ジュを一 ように説明する。 観点や いての反省のみから得る結論はこうである。 中にある心的対象物であった(内在論的錯覚)。しかし、イマージュの意識についての反省は、イマージュがそのよ 的心理学における「イマージュ」についての理論を批判する。諸々の近代哲学にしろ実証的心理学にしろ、イマー .擬物論的錯覚)。そしてそれらのすべてに共通するわけではないが、イマージュとは「意識内容」すなわち意識 『イマジネール』に先立って書かれた『想像』において、 性の確認から、 「常識の観点」 種の惰性的な即自的に存在するものとみなし、すなわちイマージュに事物の性格を附与して来たのである 「イマージュとしてのイマージュの純粋な観想から精神をそむけるや否や、つまり諸々のイマー は擬物論的錯覚に陥ったのか。サルトルは、 存在の同 一性の確認へと移行することになる。 「意識の中にはイマージュはないし、イマージュはあり得ないであろ サルトルは擬物論的錯覚に陥った近代哲学および実証 「常識の観点」が擬物論的錯覚に陥る様を次の -----イマージュを、それ自身ひとつの事物と イマージュとはすなわち対象物であるが故に、

である。 真の上に即自的に存在するのは灰色の斑点模様であり、それは焼きつけの具合を調べるカメラマンの知覚の対象物 るのである。写真の上に対象物としてのイマージュが事物のように即自的に存在しないのは明きらかであろう。 在の同一性の確認」であり、とりもなおさず、擬物論的錯覚である。かかる事態が心的イマージュについても起こ 性の確認」である。そして、そこからAさんのイマージュが対象物として写真の上に存在すると錯覚するのが、「存 ち対象物である」と誤解を招きそうな表現がなされているが、 これは一枚の肖像写真を見せられた時に口に 出る イマージュと同様にイマージュの本質をそなえている物的イマージュ(写真や絵画)について考えればよくわかる。 して存在する いであろう。そして、イマージュは対象物として存在するという錯覚から解放されて、イマージュの意識について る場合と遠くから観る場合とで全く異なるイマージュが生まれるダリのだまし絵の例を考えれば、更にわかりやす 「これ(イマージュ)はAさん(対象物)だ」という発言に対応する。それが「イマージュと対象物の本質の同 内在論的錯覚は、写真のような対象物が意識の中にあるとみるのである。) ここで「イマージュとはすなわ 物的イマージュが対象物として即自的に存在しないことは、ゲシュタルト心理学の反転図形や、近くで観 《事物のコピー》 にしてしまう。」これは心的イマージュについて言われているのであるが、(%) 心的

という三つの型に弁別することに基づいて、サルトルは知覚および概念と峻別されるものとしての想像意識を問題 く想像意識の分析を行なっている。対象物に関係するしかたの相異によって、反省作用が意識を知覚・想像 学である。サルトルは『イマジネール』において、反省的記述に基づく想像意識の本質の把握、 「イマージュはひとつの意識である」という『想像』の結論から出発する想像意識 およびそれに基づ の現象

反省してみれば、イマージュは意識の作用であると結論される。

『イマジネール』は、

の対象とする。さて、

想像意識はひとつの意識であるのだから、

何ものかについての想像意識である。想像意識の

例としてとりあげられたのであって、 子に直接に関係するひとつの綜合的組織が問題になっているのであり、その綜合的組織の本質はまさしく現実に存 である。 ル の中に這入って来ることはできないということである。すなわち《想像意識の対象物は超越的である》ということ 象物である現実に存在する対象物が意識の中に這入って来ることができないのと同様に、 に存在しないキマイラやケンタウロスも想像意識の対象物となり得るのであるが、 在する椅子に何らかのしかたで関係することである。」ここでは現実に存在する対象物についての意識が、(3) である。 て措定する。」と言う。 すなわち措定作用の n を意味している。 の差違は想像意識にとって本質的な差違ではないとサルトルは考えている。ここで言われていることは、 によれば、 ているいま一つのことは、 象物が意識に内在的なイマージュであるという考えをサルトルが否定することは既に見たとおりである。 対 象物を現実に存在するものとして措定する知覚から区別して、 それは私が腰かけているこのわらの椅子である。 「私がこの椅子を知覚するにせよ想像するにせよ、 ひと つの事物についての知覚意識および想像意識の対象物は異なるものではなくて、 現実に存在する椅子もケンタウロスも超越的対象物であって意識に内在的ではない。ここで言わ 相異であるということである。 そして、 知覚から想像を区別するものは、 想像意識の措定作用の四形式を分析する。 想像意識の対象物は存在するものであると、言われているのではない。現実 -----意識の或るひとつの型、 私の知覚の対象物と私のイマージュの対象物とは同 対象物の相異ではなくて、 サルトルは、 「その作用は、 「想像意識はその対象物を無とし 対象物が現実に存在するか否か すなわち現実に存在する椅 想像意識の対象物も意 対象物に関係するしかた 対象物を、 同一のその事物 現実に存在 知覚の対 サルト

とになる。

もできる。」ちなみに、概念と想像との区別について言えば、概念作用は対象物の本質あるいは意味を措定するの(32) であって対象物そのものを措定しないのに対して、想像においてはその対象物が「準観察」と名づけられる「直観 る。またその作用はそれ自身を《中和する》ことすなわちその対象物を現実に存在するものとして措定しないこと しないものとして、あるいは不在のものとして、あるいは他所に現実に存在するものとして、措定することができ

実性を帯びている。」すなわち、非現実的対象物は、現実的なものの世界の秩序に属しておらず、これを超えてい(3) 現実的であるのは対象物の素材のみではない。対象物が従わせられている空間規定・時間規定はすべて、この非現 想像意識の対象物は非現実的対象物である。 想像意識は非現実的対象物へ向かっての超越である。「一般に、非

る。ところで、「想像意識は、その対象物を無として措定する」と言われたのであるが、このサルトルの「無」を

積極的な意味に解してはならない。無は即自的なものではあり得ない。無は存在の無でしかあり得ない。サルトル

的相」のもとに与えられる。

像意識は非現実的世界を彷徨するのではない。サルトルは、「非現実的世界は存在しない。」と言う。 反対にサル れ得ない。」と言う。すなわち、無が体験されるのは、想像意識が現実的なものの世界を超えて(これを否定して)(※) は、「無の把握は直接的な開示によってはなされ得ない。」あるいは「無は何ものかの下部構造としてしか与えら(34) 非現実的対象物に向かって自己を超越する時のその否定作用においてであるということであろう。したがって、想 論する。 トルは 「非現実的なものは、 非現実的対象物は超越的なものであり、想像意識は世界の否定における世界への超越であるこ -----自らが否定するこの世界の地の上につねに構成されなければならない。」と結(3)

越的対象についての意識であり且つそれ自身についての非措定的意識であり、そこには「我れ」など存在しない。 存在する「超越論的我れ」が意識を統一しているのではない。 意識の中あるいは背後に存在すると考えられた「我れ」について言えば、そのようなものは存在しない。意識を統 一しているものは、 自我の超越性。 これは私にとっても他者にとっても超越的な対象である。一方、 超越的対象であり、意識それ自身の時間的統一である。「我れ」とは内面性の表現にすぎない。 -非反省的水準における対象としての心理=物理的な自我が超越的なものであるのは言うまで 意識は純粋な自発性であって、非反省的意識は、 諸々の近代哲学において考えられている 超

のである。サルトルは、 中に「自我」を持ちこむ哲学は、 + ・ルトルの自我の超越性についての考えを短かく要約すれば、以上の如くである。サルトルから見れば、 自我の超越性を主張し、 意識に受動性と不透明性を附与して、 「超越論的領野」を純化して、 意識を破壊する擬物論的錯覚に陥ってい 「超越論的領野」は 意識の

る。それは、

超越的な対象物である。

「我れ思う」が現われるのは反省的意識に対してであって、「我れ」とは、

反省的水準に現われる心的な対象物であ

ルは、 サルトル 規定したのである。 いは背後に自我が存在するとなす擬物論的錯覚を却けて、 以上見て来たように、 人間的現実の存在論的分析において、 の哲学の根本概念である「意識の指向性」の概念は「超越」の思想を含意するものであり、 意識とは、端的に言えば《超越》であり、超越的対象物に対する関係である。そして、サルト サルトルは、 意識の中に意識の対象物が存在するとなす擬物論的錯覚、 対自存在を即自存在の否定と、 意識を純化してまったく透明なもの無であるものとして すなわち意識を存在の無と、規定した。 意識 の内部にある 「超越」は意

識が世界に対する否定的関係であることを意味するものであった。そして、この「超越」という否定的関係こそが

「原初的な」ものであるというのが、サルトルの主張である。サルトルの哲学は超越の哲学である。(36)

現象が要求する存在の超現象性を認めなければ、内在論的錯覚に陥るであろうし、二つの超現象的存在をそれぞ

したり、あるいは関係項の一方を消去したりして来たのが、共通して擬物論的錯覚に陥った近代哲学の歩みであっ という一対であり、関係である。関係項の各々を実体化したり、あるいは関係項の一方を実体化して他方を相対化 れ即自的に孤立して存在するものと見るならば、擬物論的錯覚に陥るであろう。具体的なものとは、《人間=世界》

サルトルの豊かな「人間的現実」の存在論的分析は、かかる近代哲学の超克の試みである。

注

- 1 初期著作においてはフッサールにならって「超越論的領野」「超越論的意識」という言葉が出て来るが、 は空間を予想させるし、 「超越論的」は多分に認識論的用語である。 『存在と無』では使われない。
- 2 J.-P. Sartre, L'être et le néant, Gallimard, p. 20.
- 3 Ibid., p. 20.
- $\frac{1}{4}$ Ibid., p. 115
- 5 Cf. Ibid., p. 115.
- (6) Ibid., p. 27.
- J.-P. Sartre, Situations I, Gallimard, p. 31
- のにふさわしい。 サルトルはフッサールの現象学にこの名称を与えたのだが、この名称はむしろサルトル自身の存在論に与えられる

- 8 L'être et le néant, p.17.
- 9 Ibid., p. 19.
- 11 10 Ibid., p. 20.
- 13 12 Ibid.,Ibid., p. 23 Ibid., p. 22. p. 12.
- 15 16 14 Ibid., p. 25. $\it Ibid.,$ Ibid., , p. 14. p. 16.
- 19 18 $\it Ibid.,$ Ibid.,p. 27. p. 27.

17

Ibid.,

p. 27.

- 20 Ibid.,, p. 28.
- $\widehat{21}$ Ibid., p. 29.
- 23 22 サルトルにおいては、指向関係も存在関係のひとつであり、その根源的関係である。
- M. Contat et M. Rybalka, Les écrits de Sartre, Gallimard, p. 71
- 25 $\widehat{24}$ Situations I, p. 29. J.-P. Sartre, L'imaginaire, Gallimard, p. 15
- 26 L'être et le néant, p.63.
- 27 J.-P. Sartre, L'imagination, P.U.F., p. 162.
- 28 L'imaginaire, p. 15.
- L'imagination, pp. 3-4.

- 30 L'imaginaire, pp. 16—17.
- 31 Bid., p. 23.
- 33 32 Ibid., p. 163. Ibid., p. 24.
- 35 34 Ibid., p. 171. Ibid., p. 237. Ibid., p. 238.
- Cf. 註 (1)。 Ibid., p. 236.

<u>37</u>

36

(L'être et le néant, p.38.)

引用の訳文に関しては、多くの場合、人文書院版サルトル全集を使用した。

「二つの存在領域の関係は、一つの原初的な湧出であり、これはそれらの存在の構造そのものの一部をなしている。」

(大学院学生)